

■お色気全振りマルティナさん vs スライム姦——異種交姦即墮ち屈服

人里から少し離れた森。背の高い木々が並び、昼間だというのに陽の光を遮り暗い空間が続く。光の無い場所とあって、野生動物は多くない。もちろん夜行性の種、闇を好む種は存在するが、それらはひっそりと、常に怯えながら暮らしている。

恐怖の対象とは魔物……魔王の出現により活性化し、様々な場所で幅を利かせる、あらゆる動物の天敵である。特にこのように人の眼が届かない場所は彼らの好む場であり、この森も棲家の一つとされていた。

魔物が多く出現するようになったことで、ますますこの森は人を遠ざけた。魔物が出ると知らずとも、森が放つ不穏な空気は不吉が目に見えているのだ。

そんな森——魔物の巣と化した場で、楽しげに歩を進める者がいた。頭髪で結んだ長いポニーテールを揺らし、軽快に歩く者の名はマルティナ。魔物の有無を問わず、森の中にしては露出の多い——というよりはメリハリのついた肉体を強調する軽装に身を包み、仲間を引き連れているわけでもない、一人の女性だ。

彼女はこの森が魔物の棲家だと知らないわけではない。にも関わらず軽装かつ単身でいるのは単純明快。彼女が魔物よりも遥かに強いからだ。

マルティナは幼い頃より武道の達人に修業をつけられており、天性の才覚もあって闘士としては人間離れした身体能力を身に着けた。一見すればグラマラスな長身だが、その脚が放つ蹴りは艶めかしさからは想像もつかない速度と破壊力を誇る。

人間の平和のための魔物討伐と、更なるレベルアップの修業。それらを兼ね、敢えてこの森に足を踏み入れていたというわけだ。

そんな招かれざる客をもてなそうと魔物が複数出現。マルティナは歩を止め、長髪だけでなく大きな胸も揺らして構える。修業のため、敢えて自分からは仕掛けず魔物の攻撃を待つ女闘士。だが、魔物は飛び出て来ておきながら、なかなか仕掛けない。

というのもマルティナを見た瞬間、その眼が女闘士の美貌に奪われたからだ。

「あら……みんなオスだったのね」

予想外の事態に微笑む女闘士。その笑みには、魔物も虜にする小悪魔的な魅力が詰まっていた。何せ今のマルティナは、スキルをお色気極振りにしてあるのだ。

闘士としてだけでなく、女性としても優れた素質を持つマルティナ。試しに覚えたお色気技を使うのが案外楽しく、闘士として充分すぎる実力を持つがゆえの余裕から、女性としての技を磨くのに夢中になっていた。

結果、気付けば人間の男だけでなく、魔物すら魅惑する色香を会得していたのだ。

更に、今の装備はバニー衣装。ウサギを模した耳のカチューシャ、タイツにハイレグスーツというセクシー特化の容姿であり、今のマルティナを見れば女性であろうと惑わされるのではないかと思える妖艶さを放っている。

極度の発情により魅了され、身体が固まる魔物たち。それらを見やり、マルティナは余裕の笑みを浮かべたままゆつくりと歩み寄る。

「これは……ぱふぱふだけでも勝ててしまいそうねえ♪」

そう言い、敵の一体……スライムに触手が付いた魔物、ホイミスライムの頭部を両手で優しく抱える。魅了さ

れて抵抗できず、マルティナに釘付けとなっている敵の顔を、ゆっくりと胸元に沈めさせる。

マルティナの胸部には、女性ならではの柔らかな胸乳が実っているが……その大きさは魔物と戦う闘士には似合わぬものだ。

大人の手にも余りあるボリュームがバニースーツを押し上げ、浮き出た滑らかな曲線は形の美しさを衣装越しにも主張している。

それでいて腹部は必要最小限の肉がついただけであり、見事なくびれが出来ている。一見して細身に見えるからこそ量感を強調されたバストは爆乳と呼ぶに相応しく、まさに雄の理想そのものである。

それに触れた途端、ホイミスライムは肌を通す刺激に一度大きく痙攣するが……柔らかな乳肉に埋められると、あとは小さく戦慄くのみとなる。

「ほおら、ぱふ♥ ぱふ……♥ ふふ、気持ち良い？」

押せば跳ね返る弾力と、優しく包み込む柔らかさが同居した理想の乳肉。それにうずもれることで、雄として酷く興奮していながらも攻撃的な精神が鎮められているのだ。

マルティナの甘しさと妖しさを兼ね備える囁きもあり、魔物は即座に無力化する。そして顔ほどもある乳球で数回挟むと、また一度大きな痙攣をした後、全身が脱力。

恍惚感のあまり、ホイミスライムが失神したのだ。色気を攻撃力に変えるお色気スキルならではの所業である。

触手の先端から白く濁った液体を垂らして眠る魔物を放り捨てると、残った魔物に視線を送る。

「さて……次はどの仔かしら♪」

淫魔じみた蠱惑的な眼で見られ、魔物は畏れたような、それでいて期待も込めた顔で硬直。

魔物が自分に対し、虜になって一切手を出せずにいる——その状況に嗜虐欲を刺激され、マルティナは舌なめずりして次の魔物に密着する。

「じゃ……次はキミね♥」

——そうやって、魔物を次々とお色気技で倒していくマルティナ。

お色気スキルを磨いたことで生来の嗜虐欲・支配欲は増幅されており、それがそのまま攻撃力となって魔物を返り討ちにしていく。

倒される魔物は傷一つ負わずに無力化され、ある意味では最も平和的な攻撃だ。マルティナ自身も雄を虜にする嗜虐的な快感に夢中になっている。

そして最後の魔物も失神させ、淫靡な女闘士は勝利を確信する。

しかし、彼女は気付かなかった。

彼女の強さに恐怖しているがゆえに距離を置き、背後から回り込んでいるスライムがいたことに。

スライムは背後からしかマルティナを見ていない。そのために色香の効果も半減され、それでいて牝としての魅力は伝わっているために欲情し、本来のモンスターらしい攻撃的な性欲に溢れていた。

「さぁ……そろそろ締めにかかるわよお♥」

マルティナは雄を懐柔させることに夢中になり、背後から狙いをつけるスライムが近付いても気配に気付けない

い。

スライムが頭部の突起——生殖器を硬直させ、人間の男性器以上に大きく昂ぶらせる中、マルティナは失神した魔物にトドメを刺そうとセクシービームの構えをとる。

「トドメよっ♪ セクシーー……」

ずぶんっ♥♥

「っほおっ♥♥♥♥」

ハートを模った手から色香を攻撃力に変えて放つ技。それを繰り返すため、必要以上に艶めかしいポーズを取ろうと前屈みになり、後ろに突き出された腰——無防備になった股間部に、スライムの不意打ちが突き挿さる。

それはまさに痛恨の一撃。片や鍛え上げた闘士、片や底辺の魔物とはいえ、見事に決まった急所への攻撃は相当な威力であり——同時にお色気スキルの影響による快楽を生み、マルティナは予測もしていない不意の衝撃で一瞬にして性感の絶頂に至る。

(スライム?!♥ いつの……間に……♥ ダメ……意識が……♥)

元が粘液じみた性質のため、硬直していながらも布を擦り抜け、牝秘部を搔い潜ってずっぼりと挿入された異物。そこでようやくマルティナはスライムの頭部……勃起した部分が後ろから飛び付き、犯されたことを理解する。

しかし理解し、油断を後悔してももう遅い。お色気技を磨いたとはいえ、このような攻撃など想定しているはずもなく……マルティナは牝孔から脳天まで突き抜ける快感に意識を失いそうになる。

「っ♥ くふううっ♥♥」

何とか意識を保つものの、体勢を崩して前のめりに倒れてしまう。その際の衝撃でも膣内の勃起を感じさせられ、再び色っぽい喘ぎが出る。

だが喘いでいる場合ではない。魔物に犯されているとなれば、ただちに引き剥がさなければ……そう思うものの、スライムは異様に柔軟で粘液のようになり、秘部に密着して剥がすのは困難。しかも身体の力が劇的に抜けており、スライムが少しでも震動すれば姿勢を変えるのすら困難になる。

「こ、のっ♥ 離れなさいっ♥ あ♥♥」

ただ粘つくだけならともかく、脱力の影響は致命的なまでに大きい。そしてその脱力は快楽によるものであり、犯されていると知ってもなおその快感が治まらない。

お色気スキルを磨けば、その分だけ性的な行為で快感を得られやすくなる。これは性的行為時の痛みを防ぐのに役立つ。

そして快楽増大も、性的行為を遂行しやすくするためものもの。本来ならばこのような事態も愉しみつつ相手を翻弄するのだが……

不意打ちが完全に決まったために快楽が仇となり、実力差を覆される事態に陥っているのだ。

「嘘でしょっ♥ スライムなんかに……おっ♥ 奥にっ♥ 入らないでっ♥」

一般人でも討伐は不可能ではない雑魚の代表格。それにまんまと陵辱されることに屈辱を感じるが、まともな抵抗はできず四つん這いで悶えるしかない。

しかも粘液ペニスは伸縮が容易なのか、小さな体格からは考えられないほど深い位置まで侵入してくる。密着される面積がじわじわと増え、それに比例して快樂も増していく。

「奥っ♥ くつつかないで♥ あっ♥」

にゆるるっ♥ ぐじゆるるっ♥

「あああっ♥♥ スライムの突起が、こんなに気持ち良いなんて……そんなっ……♥♥」

お色気スキルアップの際に性知識も得た。その中にはスライムなど魔物に関する知識もあり、スライムの感触は意外に気持ち良い、という情報もあった。実際に魔物と性的関係になる者などそうそうおらず、知識は信憑性に欠けていたのだが……いざ初めて犯されることで、少なくとも今この状況において、その知識が当てはまることを実証してしまう。

ぷるぷるとした表面に触れるだけならともかく、挿入され、中の膣壁を粘液刺激されるのがここまでの快樂を生むなど想像できるはずもなく、マルティナは対抗できない心地よさに追い詰められていく。

「真ん中は、硬いの♥ 表面がどろどろして♥ な、中に♥ こびりつくう♥」

ぐじゆるるっ♥ にゅぶっ♥ じゅぶにゆるるっ♥

「ダメ♥ 粘つかないでえっ♥♥」

芯は人間の勃起を挿入された時の硬さでありながら、表層は柔軟に流動するスライムペニス。力強い注挿をしつつ膣壁の一つ一つが密着されて余すところなく刺激される新感覚は、いかにお色気スキルを鍛えたマルティナであろうと対処不可能。

更に表面の粘液がところどころ粘り気を増し、膣壁にこびりつく。その状態で注挿されると、こびりつかれた部分が的確な強さで膣壁に食い込み、ピンポイントで熱感を帯びる。肉壺の中が不秩序に熱され、予測できない欲悦に翻弄される。

「くふうっ♥♥ 人のオマンコに……何しがみついているのよ♥♥ いい加減っ♥♥ そのチンポっ離れなさいっ♥♥」

ヒップアタックの要領で腰を振り、その勢いで振り払おうとする。筋肉の上に脂の乗った、胸と同じく理想形の爆尻が凄まじい迫力で振りたくられる。

しかしマルティナの言う通り、粘性を増した一部が牝壁にしがみついているかのように引っ掛かっているため、スライムは股間から離れない。尻を振った勢いで僅かに外に抜き出るが……引っ掛かりを利用してすぐに押し戻され、むしろ尻を振った勢いのせいで注挿の強さを上げてしまう結果となる。

「んおっ♥♥ スライムの、分際でっ♥♥ いつまで挿れてっ♥♥」

じゅぶっ♥ じゆるっ♥ じゅぼぼおっ♥

「挿れっ♥♥ お♥♥ やめなさいっ♥♥ それっ♥♥ 引っ掛かるのはああっ♥♥」

(この粘り気♥♥ これ……強過ぎよおお……♥♥)

抵抗すればするほど、柔の力で反撃される。陵辱する内にスライムも犯す要領を掴み出しているのか、粘つき

注挿の具合とが更に巧みになり、更に快樂を与えるペースが加速する。

「ま、待って♥♥ それ以上は♥♥ それより奥はダメっ♥♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で！